

海外の障がいアートに対する認識と現状 リサーチ2025

台湾



[Rethinking disability through art](#)

目次

1. [サマリー](#)
2. [背景](#)
3. [現状](#)
4. [今後の展望](#)
5. [参照記事一覧](#)
6. [アーティスト紹介](#)

1. サマリー

感じたこと

台湾出身の障がいを持つアーティストは二分化しているように思われた: 1. 障がいの慈善モデルを自ら受け入れ・制作活動を行う者、2. 純粋にアートとしての価値を評価してもらうことを望み(その中の多くが)、海外(アメリカ等)に移った者。台湾で未だ支配的な障がいの医学・慈善モデルを自ら受容したアーティストたちは、台湾社会で支配的な認識に応えるものを作り出し、それらを評価されているが、その行為自体が、障がいの社会モデルへの認識の移行を妨げているのではないだろうか。その結果として、作品のアートとしての価値を純粋に評価されたいと望むアーティストが国外に出る動機の1つになっているように思われた。

国内の社会の認識に影響を受け・適応したアイデンティティを持つアーティストとその認識に応えずに、純粋にアーティストであるというアイデンティティを持つアーティストが混在している。

背景

障がいの医学モデルと障がいの慈善モデルが現在も支配的

- 「(...)社会の中で障がい者は守らなきゃいけない存在であったり、自らの意志を伝えることのできない幼児のように扱われることがよくあります」
- 「未だ社会が概して障がいの問題への枠組みと対応に、生物医学的な障がいに対する認識に基づく(障がいの)医学的対象化を用いている」

家族の体面にとって望ましくない存在とみなされることが多い

- 「(...)障がいを持つ人が家族の構成員の中にいることに関する恥を文化的信念として持つ(...)」

現在の台湾政府は、歴史的背景から台湾を先進国と認められる国にすべく、障がい者関連の事項にも取り組むが、それら取り組みと実際の台湾社会/台湾の人びとの意識との間に齟齬が生じている

- 障がい者関連政策は、障がいに対する社会文化的理解の欠如に対応できておらず、障がいを持つ人は今もスティグマを受けている
- 障がい者に対するコミュニティベースのプログラムと自立生活支援の提供の動きは極めて遅い
- 社会の人びとは、障がいを持つ人の参加が歓迎されなければ、多文化で包摂的な社会の創造は不可能であることをほとんど認識していないという

現状

結果として台湾出身の障がいを持つアーティストは二分化しているように見える: 1. 障がいの慈善モデルを自ら受け入れ・制作活動を行う者、2. 純粋にアートとしての価値を評価してもらおうことを望み(その中の多くが)、海外(アメリカ等)に移った者

台湾の障がいを持つアーティストがよく用いるお決まりの“(困難を)乗り越えた話”とは、アーティストが作品を創造するために障がいを乗り越えた、と認識されるよう、彼らの障がいを強調している

自身は“(困難を)乗り越えた話”を語るアーティストではないとするアーティストは、そのような多くのアーティストは単に人びとが期待するものを提供しているだけであるため、彼らとそれに関心を寄せる人びとに批判的な訳ではないという

- 純粋にアートとしての価値を評価してもらおうことを望むあるアーティストは、障がいを持つアーティストが障がいに対して憐れみを基本的な反応として示されることを拒否する時代が来た、とし(...)「障がいは私を支援するものであり、妨げではありません」(...)人びとに彼女の陶芸作品を憐れみからではなく、陶芸作品としての価値から買ってもらいたいと思っている。
- (また、(アメリカ在住の別のアーティストは、)「私は私の障がいを芸術的要素として活用することに興味があるのです」
- 他のある(アメリカ在住のアーティストも個展の開催時に彼本人は出席せず、)「もし私が展示会場にいたら、人びとが作品から私のアイデンティティを切り離すのは不可能です(...)また、私がいなくて、作品のアイデアがどこから出てきたのかを理解するのが、彼らにとってずっと容易になるはずですが(...)彼らは”障がい者じゃないから、この作品を理解できない”、と考える必要はないし、私はそれが大嫌いです」

今後の展望

台湾での障がいを持つ人のアート鑑賞・体験・活動可能性の向上と障がいを持つ人びとに対する全体的な認識の変化を望んでいた

- 多くの文化施設や団体は多様性や包摂性を新しい指針に掲げているが、劇場で観客席へは車椅子でも利用できる一方、楽屋からステージへの車椅子での移動は不可能である。また、リハーサルスタジオでも床が傷つくことを理由に車椅子禁止の場合が多く、障がいのある人が観客であり得てもアーティストであることはないという先入観があることがみられる。
- ある視覚障がいを持つ心理士は、10年前と比較すれば台北市内のアート・文化施設の(障がいを持つ人の)利用可能性は改善したが、都市部と地方には大きな差が未だに存在すると指摘し(...)アートを鑑賞する健常者とアート・文化提供者が障がいを持つ人のニーズを理解することが鍵となると述べた。

- ある先天性疾患を持つアーティストは、アメリカに移った後、障がいの社会モデルを知り、それにより自身を障がい者と認識するようになったという。(障がいの医学・慈善モデルは、障がいを個人の問題としているが、つまり、そのアーティストは先天性疾患を認識しつつもそれを障がいとは考えていなかったが、社会が彼女に対応できていないことは認識ができ、結果、自身を障がい者と認識するようになった)

台湾では、障がいの社会モデルが認知されていない、または障がいの医学・慈善モデルを支持する力が強力な状態であると思われる。

2. 背景



[Timothy Bair | Honest paintings depicting life with a disability](#)

今回の台湾に関する調査の参照記事の中には要因と思われる思想等への言及は認められなかったが、歴史的に障がいを持つ人に対する否定的な考えが存在することがうかがえた

- (...)社会の中で障がい者は守らなきゃいけない存在であったり、自らの意志を伝えることのできない幼児のように扱われることがよくあります。
- (...)「台湾では未だに、障がいを持つ人びとに対する差別が沢山あります」、と Timothy(アーティスト)は述べ、そのため彼は2015年、障がいを持つ人にとっても発達したインフラと利用可能性を求めアメリカに渡り(...)ファインアートを学部生として専攻した。
- (Timothyはこう述べた:)「台湾の文化は、体面を汚すことを許しません; 家族の名誉・矜持が全てなのです。私はそれらを扱い・深く考えたいのです」。
- 日本の占領下時代、台湾の最も称賛された作家の中に、障がいを持つ登場人物を家父長主義的封建制と精神面を破壊させる植民地化の犠牲者として描写した作家がいた。(この”障がいに対する憐れみ”が基本的な反応として現在も現れることに Chen Hsin-yaoは(アーティスト)言及しているが、彼女はそれに対して不快感を示している)(...)多くの作家が(...)(同様の動きを見せたが)He-ruo Lu(作家)は、残酷な障がいの産出を詳細に描写した作品を書き、他の作家と差別化を行った。(...)この物語は、日本占領下の台湾に既に精神病院へ送り込まれる人(直訳: 精神難民)がいたこと証明している。
- 1980年代に“機能不全者福祉法が施行されて以来、障がい者に対する社会支援は大幅に改善された。だが(...)大きな困難の一つとして、未だ社会が概して障がいの問題への枠組みと対応に、生物医学的な障がいに対する認識に基づく(障がいの)医学的対象化を用いていることが挙げられる。医学的対象化は、障がいを持つ身体は欠陥のある/不完全なもので、医学的介入により修正され、福祉制度に頼らなければならない、という考えである。(...)障がいを特定する医学的評価を重視し、障

がいを持つ人を“治す”こととリハビリテーションに焦点を当ており、障がい者が“普通”になるのを待つ、という見方も含んでいる。

- (...)障がいを持つ人が家族の構成員の中にいることに関する恥を文化的信念として持つ(...)
- (...)台湾の社会で障がいは個人の問題で個人的な悲劇だとみなされており(...)

3. 現状

台湾における障がいに対する全体的な変化

台湾政府は、その歴史的背景から台湾を先進国と認められる国にすべく、障がい者関連の事項にも取り組むが、それら取り組みと実際の台湾社会/台湾の人びとの意識との間に齟齬が生じており、結果、障がいを持つ人の状況の改善の余地は未だ大いに存在するようである

- 発展が遅れた国家として台湾は、障がいを持つ人びとの権利を擁護する組織が提唱した、障がいを持つ人の権利と彼らの利用する権利の享受を促進するよう、台北市MRTと大量輸送制度を設計した。改善の余地は常に存在するものの、台北市MRTと台湾高速鉄道は車いすでも利用できるよう、設計・建設された。
- 2016年、台湾政府は障がい者の権利に関する条約(CRPD)を批准し、障がい者への人道的取り組みを約束した。だが、その特殊な国際的な立場から、台湾は国連にCRPDに関する報告書を提出することは不可能である。その代わりに、台湾政府は5人の国際的な障がい者の権利の専門家を招聘し、国際的な検証作業を実施した。
- 2022年、国家人権委員会(NHRC)は最初の活動計画として、脆弱な集団が経験する不平等に対応するための手段を示したものを展開した。その計画は、特に台湾の障がいを持つ人が経験する、就労機会の獲得の不可能さ等の不平等に対応する、と言及し(...)彼らの個々のニーズに基づく“必要で適切かつ妥当な調整の提供”を意図したものであった(...)労働省労働力発展局は、同局の“障がいを持つ人に対する支援的な雇用サービス”計画を改定し(...)、就労を希望する障がいを持つ人がスキルを身につけて労働市場の競争に勝てるよう、個別の職業訓練・支援や個人に合わせた就労機会等のリソースを活用できるようになった。
- (台湾が今も抱える問題として)障がいに対する社会文化的理解の欠如が挙げられる。障がい者関連政策は障がいに対するスティグマと台湾社会の文化的解釈の誤りを軽視している。そのため、障がいを持つ人は今もスティグマを受けている。2020年には、障がい者のグループホームやデイケア施設建設に反対する抗議運動が起きた。
- 障がい者に対するコミュニティベースのプログラムと自立生活支援の提供の動きは極めて遅い。
- (...)社会の人びとは、障がいを持つ人の参加が歓迎されなければ、多文化で包摂的な社会の創造は不可能であることを認識ほとんどしていないのである。

経済的な問題も未だ重大事項として残っているようである

- (...)国民皆医療保健を導入しているが、障がいを持つ人の医療費は健常者より大幅に高額である。(...)国民皆医療保健と(障がい者と認定された人に対する)公的支援は医療費の減額・負担をする機能を持つが、医療費は次第に加算されていくのが現実である。更に、(...)障がいを持つからといって国(台湾)から公式に障がいと認識される保証はなく、公式に障がいを持っていると認識されたからといって障がい者として医療費控除を受けられる保証もないのだ。
- (大多数の台湾の事業では)障がいに対応するためのリソースがないため、大部分の仕事に障がいを持つ人は就くことができない。また、(...)台湾の失業者の8%が障がい者で(、障がい者人口を考えると相対的に高い)。障がいを持ち就業する人びとの年収は平均30,000台湾ドル(で、そうでない人は、その22倍の年収だという)

障がいとアートに関する状況

今回の参照記事で発言をしているアーティストのほとんどが(記事の執筆時点で)台湾をベースに活動してはいない。彼らの言動から台湾で障がいを持つ人とは、台湾の障がい者アーティストの大部分の一員として活動しない理由とは、に関わるヒントがうかがえた

- (I-Lien Ho(アーティスト))台湾では多くの支援団体はアートをセラピーや友人を作るための活動として取り入れているため、このように長い時間をかけて深く関わるのがなかなかできません。
- Chen Hsin-yaoは、障がいを持つアーティストが障がいに対して憐れみを基本的な反応として示されることを拒否する時代が来た、と述べた(...)「障がいは私を支援するものであり、妨げではありません」(...) (後述)自身を完璧主義者と表現する彼女は、人びとに彼女の陶芸作品を憐れみからではなく、陶芸作品としての価値から買ってもらいたいと思っている。
- (Sandie Yi(アメリカを拠点に活動するアーティスト))は台湾の障がいを持つアーティストがよく用いるお決まりの“(困難を)乗り越えた話”について言及した。それらの話は、アーティストが作品を創造するために障がいを乗り越えた、と認識されるよう、彼らの障がいを強調している。

だが、**Sandie Yi**は、そのような意識を持ったアーティストではないと語っている:

- (彼女は)障がいを持つことを”極めて大切な経験”であり、彼女のアイデンティティから外すことのできないものであると考えている。「私にとって、自身の身体に関するアートの制作は政治的声明なのです。それは人びとに”あなたたち健常者と同様に、私たちは美しく有能なのですよ”、と理解させようとするということではなく...そのことに興味はありません。私は私の障がいを芸術的要素として活用することに興味があるのです」、と彼女は語った。

- (彼女にとって)とって、“(困難を)乗り越えた話”に基づく創作活動は、まさに医学的診断に対する芸術的考察の幅を狭める恐れがあるため、彼女の創作活動を制限する仕方である。
- Chen Hsin-yaoも(...)自身の障がいという要素を作品に盛り込む仕方に違いがあることを認識している: 一つ目の仕方は、同情を引くことに注力し、作品を売る際に常にいかに作品の制作が困難であることを強調する、というものの(...)二つ目の仕方は、(...)自ら進んで自身の(健常者との)違いについて言及しない、というものです(...)

Chen Hsin-yaoと**Sandie Yi**は、(...)“(困難を)乗り越えた話”を語るアーティストとそれに関心を寄せる人びとに批判的な訳ではない。多くのアーティストは単に人びとが期待するものを提供しているのだ

- Sandie Yiの、“(困難を)乗り越えた話”に基づく創作をするアーティストとの対話の描写からも二つの障がい者アーティストのグループの存在が感じられる: (...)そのアーティストは、彼女が筋ジストロフィーを患っており、作品を”少しずつ”制作した、と説明した。期待を持って彼女の話の続きをしばし待った後、Sandie Yiは、そのアーティストが一切の芸術的思考の表現をする意図を持っていないことに気づいた。

「私はアメリカで作品を制作し、自身の作品について語ることに注力したいです」、と**Sandie Yi**は語る。「いつでも台湾に戻ると、違う人物を演じているような気がするのです」

- アメリカを拠点に活動するTimothy Bairも“(困難を)乗り越えた話”に基づく創作活動とは異なる創作活動に取り組んでいるのがうかがえた:
- (...)彼自身の経験を基に創作された作品は、自然に障がいを持ちながらの生活の要素も含んでいる。「これが自分の生活で、私が見たり認識する全ては障がいというレンズを通したものであることを認めなければなりません。ですが、作品が障がいに関するものではないことを、作品毎に程度は違えど、明確にしようと試みています」、と彼は語った。そのレンズを通して彼は、恋愛関係の解消の過程・男性性とは何か・彼に個人的に影響を与える広範な文化的信念体系等のテーマを扱っている。
- (2021年の個展の開催時に彼本人は出席しなかった)「もし私が展示会場にいたら、人びとが作品から私のアイデンティティを切り離すのは不可能です」、と彼は説明し「また、私がいなくて、作品のアイデアがどこから出てきたのかを理解するのが、彼らにとってずっと容易になるはずです」。
- Timothy Bairは、彼が感じていることと同じことを人びとが感じることを求めてはいない。だが彼は、作品から彼らが何かを感じることを願っている。「彼らは障がい者じゃないから、この作品を理解できない」、と考える必要はないし、私はそれが大嫌いです」(...)

4. 今後の展望



[台湾ダイバーシティ・イン・パフォーミングアーツ・レポート](#)

上記の通り、台湾にも”障がい者アート”が存在するものの、その主流な“(困難を)乗り越えた話”を伝える型に、意識的に入ろうとせず、ただしその主流な型を否定することもしないアーティストもあり、そのため、より活動しやすいと感じる地で活動するアーティストがいることが明らかになった

更に、台湾における障がい者が経験する問題はより根本的なものであったり、アートに触れる機会を得られないことを問題と指摘するアーティストが多くみられた

- 台湾では多くの文化施設や団体は多様性や包摂性を新しい指針に掲げている。しかし(...)作品を体験する以前に様々な障壁があることがわかった。また(...)劇場で観客席へは車椅子でも入れるが、楽屋からステージへは階段を登る必要があり、車椅子でステージに上がるのは不可能であるという。多くのリハーサルスタジオでも床が傷つくため、車椅子の使用を禁止しており、障がいのある人が観客であることはあってもアーティストや表現者であることはないという先入観があることがみられた。
- 「現実には、アート・文化施設に(障がい者にとっての)障壁が数多く存在しています。なので、台湾での障がい者アート運動の形成に関する議論の前に、

重点事項として利用可能性の問題に対応しなければなりません」、とSandie Yiは話した。

- 「台湾の利用可能性の向上は遅い、というのは常に感じていることです。視覚障がいを持つ人が障壁を感じない環境の創出には、なされるべき改善点がまだ沢山あると思います」、とHuang Yu-hsiang(アーティスト)は話した。
- 視覚障がいを持つ心理士のYang Sheng-hungは、10年前と比較すれば台北市内のアート・文化施設の(障がいを持つ人の)利用可能性は改善したが、都市部と地方には大きな差が未だに存在すると指摘し(...)アートを鑑賞する健常者とアート・文化提供者が障がいを持つ人のニーズを理解することが鍵となると述べた。「障がいを持つ人もただ人である、ということを理解しなければなりません。余暇活動や芸術的体験を楽しむことができるというのは人間の状態の一つであり続ける限り、そのこと(人間であること)は障がいを持つことによって変わることはありません」。
- 「障がいを持つ人びと同士がお互いに心を配り、助け合うの交流の形は、共存・共同創造・協働の中での一連の言葉と理解を育てています」、とSandie Yiは語った。

また、台湾社会が(障がいの)医学的対象化から障がいの社会モデルへ移行する必要への言及がみられた

- 医学的対象化は、障がいを持つ身体は欠陥のある/不完全なもので、医学的介入により修正され、福祉制度に頼らなければならない、という考えで(...)障がいの社会モデルは、障がいは社会的な問題であるとする考えである; 社会は障がい者の参加を促進し、彼らを積極的な社会の一員とみなすよう、変化しなければならない。台湾で強力な医学的対象化の考えでは、障がいを特定する医学的評価を重視し、障がいを持つ人を“治す”こととリハビリテーションに焦点を当ており、障がい者が“普通”になるのを待つ、という見方も含んでいる。政府も、包摂的な社会で障がいを持つ人の社会参加を促進するために、彼らが経験する社会的・環境的障壁の撤廃に積極的ではない。
- (Sandie Yiも)25歳のときに初めて自身を”障がい者”として捉え(...)、障がいとは個人と(周囲の)環境のやり取りの結果として生まれ、社会から付与された状態であるとする(...)障がいの社会モデル支持している。(障がいの社会モデルに出会ったのは、アメリカに渡ってからである)

5. 参照記事一覧

- [台湾ダイバーシティ・イン・パフォーミングアーツ・レポート](#)
- [Rethinking disability through art](#)
- [2019 "Cards for Inclusion" Project in Taiwan – A new way to play access](#)
- [Timothy Bair | Honest paintings depicting life with a disability](#)
- [The History Of Literature about Disabilities in Taiwan](#)
- [People with Disabilities in Taiwan](#)
- [How Well Does Taiwan Support People With Disabilities?](#)

6. アーティスト紹介

- [陳芯瑤\(Chen Hsin-yao\)](#)
- [黃裕翔\(Huang Yu-hsiang\)](#)
- [楊聖弘\(Yang Sheng-hung\)](#)
- [白丞斌\(Timothy Bair\)](#)